

## 本と語り合う

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者: 明治大学<br>公開日: 2013-05-27<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 飯田, 年穂<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/10291/15825">http://hdl.handle.net/10291/15825</a>                       |

# 本と語り合う



## 飯田年穂

授。(いいた・としほ) 政治経済学部教  
 国際基督教大学教養学部人文科学科  
 卒業。東京大学大学院人文科学研究科  
 比較文化修士課程終了、同博士課程単  
 位取得退学。  
 一九七七年より本学勤務。フランス語・  
 ヨーロッパ文化研究(フランス)担当。  
 フランスを中心に西欧と日本の関係  
 を比較文化的に研究。特に、自然に対  
 する人間のかかわりの問題を主要  
 テーマとする。  
 著書に『問いかける山』(木魂社)、訳  
 書に『わが生涯の山々』(ヴァルテル・  
 ボナツティ著、近藤等共訳、山と溪谷  
 社)、『モンテーニュの(エッセー)』(ピ  
 エール・ヴィレー著、木魂社)、論文  
 に『モンテーニュの『エッセー』を読む』、  
 『初期デカルトについての覚え書』、  
 『スポンキア・ソリス―デカルトと  
 パスカル―二人の科学者像をめぐる  
 て―』などがある。

みなさんも言われたことがあるかもしれないけれど、近頃は本を読まなくなったらしい。紙媒体の書籍の売れ行きはさっぱりで、本屋の商売はあがったり。たしかに日常の気晴らしとして、つれづれなるままに本を読むようなことは、以前とくらべると、随分少なくなつた。その理由はかんたんだろう。読書以外にも、ほかにたくさん気晴らしがあるからにすぎまい。

楽しいことが次々に出てくれば、あれこれ目移りするのは当たり前だ。読書だけが、何か特権的な地位に甘んじていられるわけのものでもない。ただ、そんな時代になつても、電車のつり革にぶらさがつた危ういバランスでページを開いている人を相変わらず見かけると、『セカチュウ』のようなベストセラーも立派に存在している。それどころか、最近の調査では、読書する人の割合が、このところ特に若者層で増加してきているという。まだまだ読書も健在なのだ。

僕らの子どもの頃、つまり数十年前なら、とにかく、娯楽の種類はほんとうに限られていたわけで、そんなとき、本は、手軽に楽しめる大きな娯楽のひとつに違いなかった。それは、今の子どもたちがゲームをやるのと同じような感覚でしかなかったと思う。だから、

僕らが本を読んでいると、親からは、本なんか読んでないで勉強しなさい、とか、本ばかりでなしにもっと外で遊べば、などと怒られたものだ。子どものやることは、大人から見れば、いつだって文句の対象でしかないのだ。

さて、そこで、ある作品からこんな一節を引いてみよう。

「書かれた言葉の中には、その主題が何であるにせよ、かならずや多分に慰みの要素が含まれていて、韻文にせよ、散文にせよ、たいして真剣な熱意に値するものとして話が書かれたということは、いついかなるときにもけっしてない」

「書かれた言葉」（もちろん、本もそうだ）にとつては、かなり酷いけなし方だが、これは、古代ギリシャの哲人ソクラテスが対話篇『パイドロス』（藤沢令夫訳）のなかで言っていることだ。ソクラテスによれば、書かれた言葉なんてたいして価値はないから真面目に読まなくてもいいですよ、ということになる。事実、ソクラテスは、歴史上の人物としてはあんなに有名なのに、本人は、本のたぐいは一冊も書いていない。今僕たちがソクラテスの言葉に接することができるのは、弟子のプラトンが、代わりに書き残してくれたからだ。

では、ソクラテスにとっての真実の言葉とは何かといえは、それは「魂の中にほんとうの意味で書きこまれる言葉」で、それは「書かれる」のではなく「語られる」べきものなのだ。だから、ソクラテスは、アテナイの市民を相手にひたすら語り合い、議論した。それをやり過ぎて、ついには死刑になってしまうのだが、その語り合うさまをそのままに伝えようとしたのがプラトンで、そのため、それはすべて対話の記録、つまり対話篇という形になっている。

書かれた言葉をソクラテスが重視しなかったことはほんとうだが、確かに、本を読みさえすれば、ただそれだけですぐに賢くなれるものでないことは、僕たちだってすぐわかる。やはり、読みながら、同時に自分自身の頭を、いや頭だけでなく、精神や魂や心や、つまり自分という人間のすべてを働かせることが必要だ。読み取った言葉に対して、自分なりに考えたり、感動したり、思い出したり、想像したり、答えたり、つまり対話すること、そのことによって、何かが、魂の中に消えずに書き込まれる経験が得られる。

そうして書き込まれた何かは、ほとんど真実の言葉になっているはずだ。書かれた言葉とは、ソクラテス的には、真実の言葉の「影」にすぎないが、影は、それなりの仕方、

真実在の姿を映し出すさすがでもあるのだ。影を相手にしながらにせよ、それとの語り合いは、真実在にふれるときの消息をほくらに伝えている。

プラトンが対話篇を書き残そうとしたのは、ひとつにはソクラテスの想い出を残しておきたかったこともあるが、さらに、書かれた言葉であっても、ある種の対話、もしくは対話のシュミレーションが可能になると考えたからだろう。語り合う相手が、人であれば本であれ、言葉による対話は、人間としての僕たちにとって、最も大切な働きといってよい。これこそが読書の原点だ。読書とは対話にほかならないことを、ここで確認しておこう。そして、その対話の結論を出すのが、読む人であるあなた自身であることも、わかってもらえるだろう。

それを、隠された宝を探し求める旅にたとえてみようか。あなたは、本の描き出す未知の世界に旅立って、その途中、さまざまなものに出会い、対話によって言葉を交わし、問いに答え、新たな知識や情報を得て、そこに込められた意味としての宝を見つけだす。いい加減なやり方で進んでダメだ。何が待ちかまえているかわからないし、怪物や魔物が飛び出してこないともかぎらない。下手をすると、バッドエンディングになってしまう。

だが、正しいエンディングがただ一つだけ、あらかじめ決まっているのでもない。エンディングはいろいろあつてかまわない。それは、あなたの進み方しだいで、むしろ、双方的に、読む人と本とが一緒になつてつくっていくものであるだろう。

どんなエンディングを目指すのか、読書の冒険があなたを待っている。

それにしても、プラトンの対話篇は絶対お薦め。対話的読書の素晴らしい体験ができること請け合いです。